

16世紀京都における御霊社・御霊祭の考察

—都市空間との関係に着目して—

本 多 健 一

- I. はじめに
- II. 御霊社・御霊祭の概要と15世紀までの歴史
 - (1) 上下の御霊神社と御霊祭の現状
 - (2) 15世紀までの御霊社と御霊祭
- III. 中世の下御霊社および上下御旅所の位置
 - (1) 近世の地誌および社伝の記録
 - (2) 近世初期の御霊祭神輿巡幸路
 - (3) 中世諸史料による位置の比定
 - (4) 下出雲寺の移転と上下御霊社に係る領域の境界
- IV. 16世紀の御霊祭および御霊社・御旅所
 - (1) 戦国期の御霊祭
 - (2) 安土桃山期における下御霊社および上下御旅所の変遷
- V. おわりに

I. はじめに

戦国期¹⁾における京都の市街地は上京と下京という二つの小都市に分かれ、それらの間は室町小路(室町通)によって結ばれていた²⁾。この直接的な理由は、応仁の乱(1467~1477)およびその後の戦乱によって、おおむね平安京左京域を中心に形成されていた以前の市街地の多くが被災して灰燼に帰したこと、これに伴って京都の人口が減少したこと、残された市街地も自衛のために堀、塀、木戸門(釘貫)といった要害(「構」)で圍繞さ

れ、それより外側に都市が拡大する契機が乏しかったことなどがあげられよう。

しかし、京都という都市内部で北側の上京と南側の下京という地域区分が明確に認識されるようになっていたのは、応仁の乱以前にさかのぼる。金田章裕³⁾によれば、既に11世紀末頃には「上辺り」「下辺り」という表現が現れ、次いで14世紀末~15世紀初頭には、公家・武家の町としての上京、庶民の町としての下京という表現が人口に膾炙していたという。つまり中世後期の京都は、戦国期に限らず、それ以前の室町期においても、大きく上京と下京に機能分化した都市として考察の対象にしていく必要があるといえよう⁴⁾。

中世後期の京都を対象とする研究には、都市祭礼⁵⁾の実態や変遷を解明しつつ、当時の都市空間や都市社会との関係を把握していこうとする系譜がある。その嚆矢は、林屋辰三郎⁶⁾が天文2(1533)年の祇園会(祇園祭)執行をめぐる、下京六十六町の月行事らが主張した「神事無之共、山ホコ渡シ度」⁷⁾という言葉に注目して、山鉾巡行を当時の「町衆」による都市共同体の自治を象徴する「町衆の祭」と捉えたことであろう。その後も、足利将軍らの祇園会見物を社寺政策・下京への支配政策と理解した二木謙一⁸⁾、室町期の神輿渡御費用(馬上役)をめぐる都市住民や室町幕府の関与を考察した瀬田勝哉⁹⁾、応仁の乱後の復興と祇園会との関わりについて論じ

キーワード：御霊社、御霊祭、都市空間、上京、京都

た早島大祐¹⁰⁾、そして当時の祇園会と政治権力や都市空間などとの関係について幅広い成果を発信している河内将芳¹¹⁾らの研究があげられる。都市の中での一大イベントである祭礼は、当時の政治・経済・社会・文化と密接にからみあい、時にはそれらの反映ともみられるゆえに、その実態解明は文化史の領域にとどまらず、都市史研究においても重要な研究課題といえよう。

一方で、ここに示した研究は、良質な史料に恵まれた祇園会および祇園会が行われていた下京に限定されていた。その成果を京都全体に敷衍するためには、中世後期における京都特有の都市構造を鑑みると、上京との比較考察が不可欠な課題となる。ところが、上京に関しては、今までこのようなアプローチはもちろん、そこで執り行われていた御霊祭という祭礼の実態さえ十分に解明されてきていない¹²⁾。

戦国期に描かれた『洛中洛外図屏風』のうち、上杉本や歴博乙本には、御霊祭の様子が下京の祇園会と対になるように描かれている。また、たとえば室町期の外記局官人・学者であった中原康富(?-1457)の日記『康富記』¹³⁾では、応永8(1401)年から康正元(1455)年までの間に、御霊祭が24、北野祭が19、祇園会が17、今宮祭が13回の執行記録があらわれる。さらに、戦国期の公家であった山科言繼(1507-1579)の日記『言繼卿記』¹⁴⁾では、大永7(1527)年から天正4(1576)年までに、祇園会が26、御霊祭が18、今宮祭が9回という執行記録が集計できた¹⁵⁾。以上の点から、御霊祭が祇園会と並んで、中世後期の京都を代表する都市祭礼であったと考えられる。中世はもちろん、それ以降の京都の都市構造などを解明するためにも、上京の御霊祭研究は喫緊の課題なのである¹⁶⁾。

筆者は、その執行記録などに依拠して、15世紀までの御霊祭を対象に若干の基礎的考察を行った¹⁷⁾。しかしこの過程で、神社が上御

霊と下御霊とに分かれており、それぞれの祭礼も別々かつ同時に行われていたため、相互の関係性はもちろん、そもそも史料上の「御霊祭」や「御霊社」といった記述がどちらを指しているのか見極めることも難しいという問題があぶりだされた。この問題の克服には、上下の神社の位置、および祭礼時に神輿が渡御する御旅所¹⁸⁾の位置を時代毎に比定し、その上で両神社に係る領域、すなわち「祭礼敷地」ないし後の氏子区域¹⁹⁾の範囲をある程度確定することが前提条件となる。これによって、たとえば祭礼がどこで目撃されたかが明記されていれば、それが上下どちらの祭を指すのか見当がつくと考えられるためである。

以上より、本稿では中世末から近世初頭、すなわち16世紀を中心にして、上下御霊社および御旅所の位置とその変遷などを明らかにし、当時の御霊祭の実態や都市空間との関係について考察することを目的とする。

具体的な章構成は、第II章にて、上下の御霊神社と御霊祭の現状や、先行研究などで明らかにされている15世紀までの歴史を概観する。第III章では、中世における下御霊社および上下御旅所の位置を比定する。その際、まず近世地誌などに依拠して、当時伝えられていた位置の確認や神輿巡幸路の復原を行った上で、中世の絵画史料や文献史料などを用いて検証する。第IV章では、16世紀における御霊祭や御旅所の変遷を、文献史料などから明らかにするとともに、当時の都市空間との関係を考察していきたい。

II. 御霊社・御霊祭の概要と15世紀までの歴史

(1) 上下の御霊神社と御霊祭の現状

御霊祭は御霊社(御霊神社)の祭礼として、史料上記録されてきた。しかし、現在の京都の御霊神社は上下に分立しており、祭礼もそれぞれに行われている²⁰⁾。

現在の上御霊神社（上御霊社）²¹⁾は京都市上京区上御霊前通烏丸東入ル上御霊堅町に、下御霊神社（下御霊社）は京都市中京区寺町通丸太町下ル下御霊前町に位置しており、両社は直線距離で2キロメートルあまり離れている。主祭神は両社とも八所御霊神とされているが、個別の祭神は異なっている。祭神の多くは、平安期以前に政争に敗れて非業の死を遂げ、疫病などの災厄を引き起こす怨霊（御霊神）になったとされる人物たちであるため、もともとは疫病への恐れから御霊神を慰撫した御霊信仰に基づいて創祀された神社と考えられる。

両社の氏子区域は、享保2（1717）年頃の『京都御役所向大概覚書』（以下『大概覚書』）²²⁾には次のように記述されている。

一、上御霊 氏子 東ハ賀茂川限、西ハ東堀川限〔但、一条より北ハ小川通東側限〕、北ハ野限、南ハ出水通北側限（〔 〕内は割注、以下同じ）

一、下御霊 氏子 東ハ賀茂川限、西ハ東堀川限、北ハ出水通南側限、南ハ二条通北側限 外二二條川東新地 東ハ野道、西ハ賀茂川堤半町東、南ハ孫橋通限、北ハ二條通筋限

この状態は現在でもほぼ同様である。すなわち、上下御霊神社あわせた氏子区域は、おおむね鴨川（賀茂川）を東限ないし北限とし（ただし、下御霊神社のみ鴨川東岸の「二條川東新地」に氏子区域がある）、二条通が南限、堀川通ないし小川通が西限となっている。そして上下両社の境界線は、京都御苑の西側では出水通、東側では荒神口通であり、これは出水通をそのまま延長した位置にあたる（図1および図2）。

現在、上御霊祭は5月18日、下御霊祭は同日に近い日曜日に還幸祭が執り行われ、両祭礼とも剣鉾などに供奉された神輿が氏子区域

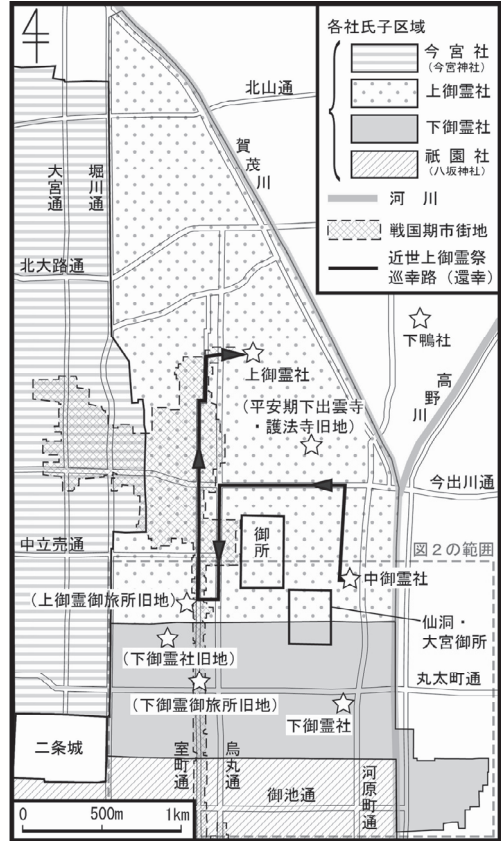


図1 上御霊・下御霊社氏子区域関係図

出所：1/10,000地形図を基図として『大概覚書』などの各種資料より筆者作製。

を巡幸している。これに先立って両社とも5月1日に神幸祭が行われるが、これは神輿を境内に据えて執り行う神事であり、神輿渡御は行われない。江戸時代以前では、ともに7月18日が神幸祭、8月18日が還幸祭であり、両日神輿が巡幸していた。

また、現在は上下両社とも祭礼時に神輿が駐輦する御旅所は存在しない。上御霊神社のみ、江戸時代には現在の東山区寺町通広小路上ル中御霊町に「中御霊社」と呼ばれる御旅所があったが、明治の初めに廃されている。

(2) 15世紀までの御霊社と御霊祭

上下の御霊社とも、創祀の年や経緯などは

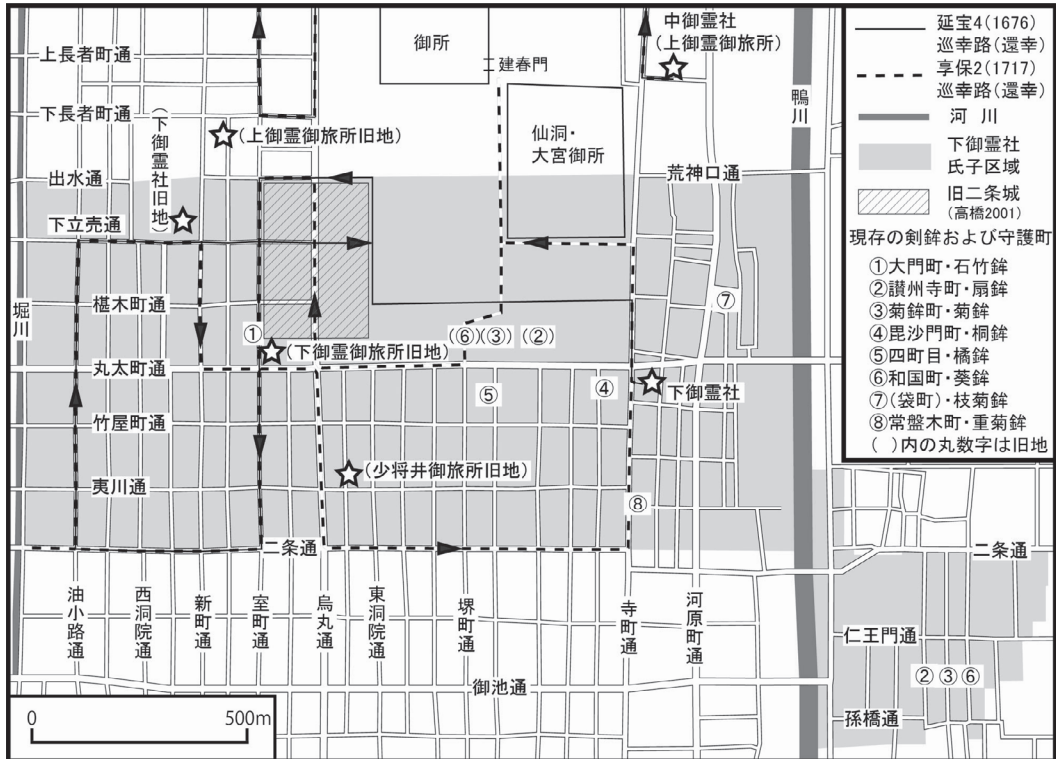


図2 下御霊社氏子区域詳細図

出所：1/10,000地形図を基図として『大概覚書』などの各種資料より筆者作製。
 注：図中の剣鉾⑦枝菊鉾の守護町は毎年変わる（2011年は袋町）。

はっきりとしない²³⁾。しかし、先行研究では現在の京都盆地北部にある出雲路（おおむね現在の賀茂川、今出川通、烏丸通、紫明通に囲まれた地域で、京都市上京区北東部および北区の一部）といわれる地が、平安京造営以前から上下の里に分かれており、それらの里に建立された上出雲寺・下出雲寺という寺院の鎮守社として創祀されたと考えられている²⁴⁾。したがって、両社は当初から別々に創祀され、史料上「御霊社」と表記されていたとしても、実態は常に上下に分かれていたと推定される。

一方、御霊祭の起源もはっきりしないものの、11世紀には「出雲寺御霊会」が確認され²⁵⁾、これが後の御霊祭の前身と思われる。鎌倉期には、「御霊祭」という呼び名で神輿

巡幸などが行われる都市祭礼となっており、その頃には神社が創祀され、祭礼も上下別々かつ同時に執り行われていたとみられる²⁶⁾。室町期から、御霊祭の記録はきわめて多くなり、足利将軍による見物がしばしば行われるなど²⁷⁾、京都を代表する都市祭礼の一つになったといえる。

応仁の乱（1467～1477）によって、他の祭礼と同じく御霊祭も長期間の中断を余儀なくされたが、明応7（1498）年になって31年ぶりに神輿の渡御が復活している²⁸⁾。下京の祇園会復興に先立つこと2年であった。

Ⅲ. 中世の下御霊社および上下御旅所の位置

(1) 近世の地誌および社伝の記録

上御霊神社の位置が創祀当初より現在地か

ら動いていないのに対して、下御霊神社は何回か鎮座地を移っていると考えられている²⁹⁾。一方、既に寛喜2(1230)年には7月18日における神幸祭(神輿迎)の記録があるので³⁰⁾、この頃には御旅所があったと推定される。

表1に近世以降の主要な地誌および社伝における、中世の御霊社・御旅所の位置についての記載をまとめた。これによると、上御霊

御旅所は、中御霊社以前には新町通下長者町下ル(上京区両御霊町北側と御霊町)にあったと考えられる。

下御霊社・同御旅所の位置に関する記録のうち、比較的時代が古く、かつ信憑性も高いのは、延宝年間(1673~1681)頃、黒川道祐が下御霊社司である板垣民部(出雲路信直か)から由緒などを直接聞き取りした『遠碧軒

表1 近世の地誌・社伝に記録された中世の下御霊社・上下御霊御旅所

上御霊御旅所	「(新町通) 出水通さがる(「あがる」の間違いか) ござの町 いにしへこの町に御霊の御旅あり、今の寺町中御霊これ也」	『京雀』、寛文5(1665)年(新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書第1巻』臨川書店、1967、208頁)。
	「(新町通) 下長者町下ル 中御霊町 いにしへ此町に御霊の御旅所あり、今寺町広小路上ル中御霊是なり」	『京町鑑』、宝暦12(1762)年(新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書第3巻』臨川書店、1969、205頁)。
下御霊社・御旅所	「(下御霊社は) 中古は今の新町通の出水あがる町に社あり、旅所は室町通大門の町に在り、秀吉公のときに今の上下両所へ処かはる、此所がへの時分は、しかじかと下御霊には神主もなし、其時大方亡滅にもおよぼんとするを漸とり立、され共旅所は其時より絶ゆ、そのころ上御霊より公事をして、下御霊は此方の下と云ふ」	『遠碧軒記』、宝暦6(1756)年(日本随筆大成編集部編『日本随筆大成第一期10』吉川弘文館、1975、26-32頁)。
下御霊社	「下御霊社(中略) 当社始新町通近衛南ニアリ、今尚云御霊町」	『山州名跡志』、正徳元(1711)年(新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書第16巻』臨川書店、1969、299-300頁)。
	「社地は当初出雲郷 [一條の北京極の西] 下出雲寺境内に在りしが、爾後の当社所在地として、今明なるは左京、西洞院、町口 [今の新町]、鷹司 [今の下長者町]、勘解由小路 [今の下立売] の間に在りしことなり(中略) 天正十八年(中略) 豊臣氏、大に市衢を整理するに方りて、今の地に移転しけるなり」	下御霊神社編『下御霊神社誌』下御霊神社、1907、11丁。
下御霊御旅所	「下御霊御旅所、始室町中御門南大門町ニアリ、今ハ絶テ当社拝殿ヲ御旅所トス」	『山城名勝志』、正徳元年(新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書第13巻』臨川書店、1968、51頁)。
	「御旅所古へは室町中御門 [今いふ上長者町(「榎木」の間違い)] の南、大門町に有し也」	『京町鑑』、宝暦12年(新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書第3巻』臨川書店、1969、181頁)。
	「旅所は、古、室町丸太町北の大門町に在りて、本社の今の地に移さるる頃までは存しきといふ」	下御霊神社編『下御霊神社誌』下御霊神社、1907、11丁。

出所：各種史料より筆者作成。

注：史料の記述の()内は筆者による注記、[]内は割注。

記』の記録であろう。ただ、そこでは下御霊社の位置を「今の新町通の出水あがる町に社あり」としているが、道祐は別の個所で「下御霊は、近比まで今の新町通出水下る町に有り」と記しており、その後の記録からしても「出水下る町」が正しいと思われる。

表中の他の史料も含めて考えると、下御霊本社は当初出雲路（出雲郷）にあったが、中世には新町通下立売上ル西側（上京区両御霊町南側と藪之内町南東側）に移り、秀吉の京都改造で現在の寺町通沿いに移転したと思われる。また、同御旅所は室町通丸太町上ル（上京区大門町）にあったが、本社移転の頃に廃されたと考えられる（図1・図2参照）。

(2) 近世初期の御霊祭神輿巡幸路

中世から近世までの祇園会の神輿巡幸路を検討した河内³¹⁾は、長い間に現実の京都の都市空間が大きな変化を遂げ、御旅所も移転しているにもかかわらず、神輿の巡幸路には本質的な変化がなかったことから、「神輿渡御にとっては、御旅所の場所以上に一定の神幸路を渡御することのほうに意味がそなわっていた」としている。これを敷衍すれば、他の京都の都市祭礼であっても、近世の神輿渡御巡幸路は中世のそれを引き継いでいる可能性が高く、その復原はかつての神社や御旅所の位置の比定などに資するものが大きいと考えられる。

まず上御霊祭について、享保2(1717)年頃の『大概覚書』³²⁾に次のようにある。

七月十八日御出之節神輿貳基上御霊前之町を西江、室町ヲ南江、今出川通ヲ東江、寺町ヲ南江、上御霊之旅所中御霊江神幸

八月十八日祭礼之節、中御霊より寺町北江、今出川西江、烏丸南江、下長者町ヲ西江、室町北江、上御霊前之通ヲ東江、本社江帰座

これらの巡幸路をみると、上御霊祭の神輿渡御、特に8月18日の還幸祭では、室町通に沿った地域を巡ることに重点が置かれていたとみることができる(図1)。なお、還幸祭の巡幸路は、延宝4(1676)年の『日次紀事』8月18日条の記録³³⁾でも同じである。

次いで下御霊祭では、『日次紀事』と『大概覚書』に記述された神輿巡幸(8月18日還幸)のルートは以下のとおりである。

上下御霊会(中略)下御霊ノ神輿モ亦同時二拝殿ヲ出ツ、銚五本別当氏子并二雑色供奉、上御霊之行列ノ如シ、神幸京極ヲ出、樫町自り西ノ方、東洞院ヲ歴テ西ノ方、出水ヲ行き、室町ヲ下り、二條ヲ過キ、油小路ヲ上り、下立売東ヘ行き、東洞院ヲ下り、樫町ヲ歴テ、京極自り本社ニ入ル(『日次紀事』、読み下し文)
八月十八日祭礼之節寺町北江、武家町御門之内日之御門下ル所迄、夫ヨリ南江、堺町御門江出、丸太町西江、烏丸北江、出水西江、室町南江、二條西江堀川迄、夫ヨリ跡江、油小路北へ、下立売東江、新町南江、丸太町東江、烏丸を南江、二條東江、寺町北江、本社江帰座(『大概覚書』、「日之御門」は建春門、「武家町御門」は寺町御門)

これらのルートを図2に描画してみると、両者の違いが少なくないことがわかる。この理由は、宝永5(1708)年の「宝永大火」を契機に行われた都市改造にある。これによって寺町以西・丸太町以北・烏丸以東の公家・寺院・町家が強制移転された結果、同地域における下御霊の氏子の町々も鴨川東の二条新地(現左京区)に移り、あわせて巡幸路も大きく変更されている³⁴⁾。

対して「宝永大火」前後で変化していないルートは、室町通、油小路通、下立売通・二条通の一部などである。特に室町通では、大

火の前も後も、出水通から二条通まで神輿が氏子区域を欠かさずに巡っていることが注目される。上御霊祭と同じく、下御霊祭の神輿渡御でも、室町通沿いの地域を巡ることが重視されていたといえる³⁵⁾。

(3) 中世諸史料による位置の比定

同時代の中世諸史料による検討にあたって、まず注目したいのは絵画史料である。なぜならば、16世紀に描かれた初期『洛中洛外図屏風』³⁶⁾には、それらと思われる社殿などが描かれているためである。

最も詳細かつ具体的な描写がなされているのは上杉本である。下京隻の中では、現在の室町通丸太町上ル(大門町)の位置に「ごりやう」が西向きに、新町通下立売上ルのあたり(両御霊町南側と藪之内町南東側)に「下ごりやう御たひ所」が南向きに、新町通下長者町下ル(両御霊町北側と御霊町のあたり)に「上ごりやう御たひ所」が西向きに建っている。また、上京隻には現在と同じ位置に「上ごりやう」が描かれている。屏風中の書き込みによって上御霊本社、上御霊御旅所、下御霊御旅所と思われる社殿の位置が明らかである以上、残された室町通丸太町上ルの「ごりやう」は下御霊本社を描いたとみるべきであろう。他に歴博甲本と歴博乙本の下京隻には、ともに上杉本の「上ごりやう御たひ所」の位置に社殿が描かれているが、下御霊本社・御旅所と思われる社殿は描かれていない。

次に、中世文献史料では、まず『康富記』文安5(1448)年8月4日条³⁷⁾に「今夜七條町辺焼亡、暁天又鷹司町(現在の下長者町通新町)東南角焼亡、(中略)御霊御旅所無為、珍重々々」とある。この「鷹司町」の位置は、上杉本や近世地誌の上御霊御旅所の場所と一致する。

また、『経覚私要鈔』応仁元(1467)年7月12日条³⁸⁾には、一連の合戦で焼失した市街地の範囲として「一、鷹司東洞院ヨリ二条マ

テ、鷹司烏丸ヨリ二条マテ、鷹司室町ヨリ二条マテ、御領ノツシヨリ近衛町マテ、自其かすかまで、一、小河[北少路ノ通ヨリ]西洞院ヲ下へかすかまで、土御門油少路ヨリ中御門まで」とある。わかりにくい部分もあるが、前後の文章の流れから「御領ノツシ」(御霊の辻)とは鷹司町付近の辻を指している可能性が高い。

このように、中世の絵画・文献史料、近世地誌の記録、いずれをとってみても上御霊社御旅所は、中世以前の鷹司小路と町小路、近世以降の下長者町通と新町通とが交差する辻の東南、すなわち現在京都地方検察庁庁舎が建っている両御霊町北側と御霊町付近に比定される³⁹⁾。さらに、近世上御霊祭の巡幸路(還幸)では、神輿が下長者町通新町近くの下長者町通室町まで渡御することも(図1・図2)、中世までの上御霊御旅所が鷹司町にあった傍証となろう。

一方、下御霊本社および同御旅所の位置の比定に際しては精査が必要である。というのは、上杉本と近世地誌などを比較すると、本社と御旅所を示した位置が逆になっているからである。しかし、いずれも新町通下立売上ル(両御霊町南側と藪之内町南東側)と室町通丸太町上ル(大門町)の二地点を示していることは共通している。図2にみるように、近世下御霊祭の神輿渡御がこの二地点を巡っていたことに加え、かつての大門町は下御霊社の剣鉾の中で最も格式が高い石竹鉾を守護していたため(図2の①)⁴⁰⁾、当町にかつて本社ないし御旅所があった可能性は高い。他の場所を示すような記録もないことから、この二地点のどちらかに下御霊本社があり、もう一方に御旅所があったとみて問題あるまい。

中世の文献史料から、これらの位置の比定に資するような記録を渉猟してみると、まず『宣胤卿記』文明13(1481)年正月1日条⁴¹⁾には、年の初めにあたって多くの神祇に向けて遥拝した中に、「下御霊[巽]」と記されて

いる。同記同年正月28日条⁴²⁾によれば、当時の中御門宣胤の邸宅は「土御門西洞院」（上長者町通西洞院）にあり、新町通下立売上ルおよび室町通丸太町上ルは、そこから南東の方角に位置している。

次いで『吉田家日次記』応永9（1402）年正月2日条⁴³⁾によれば、この日吉田兼敦らは洛中諸社に参拝しているが、最後に下御霊社と上御霊御旅所とを訪れ、「此両社宿所之咫尺也、殊祈申了」と記した。すなわち下御霊社と鷹司町の上御霊御旅所とがきわめて近い距離にあったことがわかり、下御霊本社が近衛大路（出水通）をはさんですぐ南側の町勘解由（新町通下立売）にあった可能性が高まる。あわせて14世紀末には、上下両社に係る領域の境界が近衛大路に定まっていたこともうかがえよう。

さらに、明治37（1904）年、新町通下立売北西にある京都府庁本館建築工事中に、下御霊社が付属していた下出雲寺のものともみられる布目瓦が発見されている⁴⁴⁾。上御霊神社境内の上出雲寺跡でも布目痕のある瓦が発見されているため⁴⁵⁾、布目瓦発見地点付近に下御霊本社があったと考えてさしつかえないと思われる。

以上のように、16世紀以前の下御霊本社の位置は新町通下立売上ル（町勘解由）に、御旅所は室町通丸太町上ル（室町春日）に比定しようと考えられる。

（4）下出雲寺の移転と上下御霊社に係る領域の境界

第Ⅱ章第2節で、鎮守社の下御霊社と一体であったと位置づけた下出雲寺の変遷については、もう少し検討すべき点がある。文明8（1476）年、一条兼良が『古今集』注釈書として著した『古今集童蒙抄』には、安部清行の歌に出てくる「下出雲寺」に関して「出雲路よりすこし下によりたる所也、いまの毘沙門堂をいふべし」⁴⁶⁾と記述されている。建保2

（1214）年2月17日付『洞院部類記』「平親範置文」⁴⁷⁾によれば、建久6（1195）年、「護法寺」という寺が出雲路の地に移設され、後に別の2寺院と合わせて一堂となしたという。これが毘沙門堂の前身とみられており、その場所は現在の上記区上立売通寺町西入ル毘沙門町付近（図1）である⁴⁸⁾。

毘沙門堂も現在は「護法山出雲寺」と号してはいるが、以上のような経緯から判断すれば、もともと下出雲寺と別の寺院であったことは明らかである。毘沙門堂建立が既存の下出雲寺にいかなる影響を及ぼしたのかははっきりしないが、先述のとおり、13世紀初頭には上下御霊社が創祀され、御旅所への神輿渡御を中心とする祭礼も別々に行われていたことから、12世紀末頃までには下出雲寺が出雲路から移転し、早ければ、これとともに両社に係る領域の境界も近衛大路（出水通）に定まったと推測される。

注意したいのは、下出雲寺が移転した町勘解由のやや南、冷泉東洞院（現在の中区車屋町通夷川上ル少将井御旅町）には、既に12世紀初頭には祇園社の少将井御旅所が設けられていたことである⁴⁹⁾。16世紀まで存在した少将井御旅所は、下御霊社の氏子区域内にあり（図2）、祇園会の際は神輿も渡御してきていた。このように錯綜した状態になった理由や背景は不明だが、12世紀頃の左京一条三坊から同二条三坊にかけての地域に、北から出雲寺（御霊社）、南から祇園社の勢力が進出してきたのは確かといえる。これ以前に下御霊社と祇園社とに係る領域の境界線が二条大路（二条通）と定まっていたとすれば、少将井御旅所が当地に設けられたとは思われないので、この境界が定まったのは12世紀より後であろう。

IV. 16世紀の御霊祭および御霊社・御旅所

（1）戦国期の御霊祭

応仁の乱によって中断した御霊祭は、明応

7 (1498) 年に復興している。『親長卿記』同年8月18日条⁵⁰⁾には、「御霊祭今日再興(中略)但御旅所、為野中[先々在家中也]有恐怖」と記されており、御旅所近辺が戦火によって市街地から「野中」に変貌してしまったことが語られている。

戦国期京都の都市空間を鑑みれば⁵¹⁾、両社の御旅所のうち、上京と下京を結ぶ唯一の基幹道路である室町小路(室町通)沿道にあった下御霊御旅所の周囲が「野中」であったとは考えにくい(図1・図2)。一方で、室町を一筋外れれば荒廃した「野中」が広がっていたと思われ、この御旅所は鷹司町の位置にあった上御霊社のものと推定される。『大乘院寺社雑事記』明応8年7月18日条⁵²⁾も「上御霊祭也、神輿自去年奉渡之」と記しているので、明応7年に復興した御霊祭とは上御霊祭であったといえる。

さらにこれ以降、確実に上下を特定できる地名の記載がある主な文献史料を以下にあげてみる。

御霊祭也、神輿・鉾等渡今出川、自此卑屋見物、有興(『実隆公記』文亀2(1502)年8月18日条)⁵³⁾

御霊祭如例、於一条辺令見物了(『二水記』大永5(1525)年8月18日条)⁵⁴⁾

五りやうまつりけふありて、からす丸ちやうにてけんくわあり、されとくるしからす(『お湯殿上日記』天文6(1537)年11月18日条)⁵⁵⁾

召具長松丸(筆者注・山科言経)廣橋へ罷向、門前にて御霊祭見物了(『言継卿記』天文22年7月18日条)⁵⁶⁾

「今出川」、「一条辺」、「からす丸ちやう」(烏丸町)、「廣橋」といった場所は、全て近衛大路(出水通)以北に比定されるので⁵⁷⁾、いずれも上御霊祭の記録である。絵画史料においても、『洛中洛外図屏風』の上杉本にお

ける御霊祭の行列は一条町から一条烏丸にかけて東へ向かい、同じく歴博乙本では室町一条から室町北小路(今出川通)にかけて北へ向かっているように、これらも上御霊祭を描いたものである⁵⁸⁾。

一方、戦国期における確実な下御霊祭執行の記録は、永禄11(1568)年7月18日、祭礼時における「二条室町」と「上四町」の間での喧嘩についての記録⁵⁹⁾のみであった。この時期、下御霊社が(上御霊社と比べて)大きく衰退していたことをうかがわせる記録がいくつもある。まず明応9年6月、下御霊社の神主職が質に入れ置かれたが、その質主は上御霊社別当であった⁶⁰⁾。この年は上御霊祭復興から二年後であり、神輿渡御が再開されるなど上御霊社が隆盛しつつあったのに対して、下御霊社の衰退ぶりが推定されよう。時代は下がるが、表1で提示した『遠碧軒記』の記録も、16世紀後半、本社移転頃の下御霊社のありさまを表現している。

上御霊社の隆盛と下御霊社の衰退の背景には、戦国期における京都の都市空間のあり方が影響していたと考えられる。当時は上京と下京にはさまれた土御門(上長者町)以南・二条以北の地域(以下、仮に「中京」と呼ぶ)が相次ぐ戦乱で荒廃し⁶¹⁾、その大部分は下御霊の氏子区域と重なっていた(図1・図2)。もちろん、『洛中洛外図屏風』上杉本に下御霊本社・御旅所とも社殿が描かれ、それらに参詣したという記録もあるので⁶²⁾、祭礼などは細々と行われていたであろうが、上御霊や祇園に比べれば衰退の傾向は否めなかったと推測される。ただ、近世巡幸路が室町通を重視していることや、先の喧嘩の記事を鑑みれば、荒廃した「中京」氏子区域の中で唯一都市的な景観を示していた室町小路(室町通)沿いの住民が、この時期の下御霊社・下御霊祭を支えていたのであろう。

以上のような下御霊祭のあり方を踏まえれば、上御霊祭こそが戦国期、特に16世紀前半

の京都上京を代表する祭礼であったと判断できる⁶³⁾。

(2) 安土桃山期における下御霊社および上下御旅所の変遷

元龜4(天正元, 1573)年4月4日, 織田信長による上京焼討によって「御霊の社」も炎上し, 当年の御霊祭は今宮祭とともに中止された⁶⁴⁾。これが上下どちらを指すのかはつきりしないが, 西陣から放火された焼討の範囲が, 出水通を北限とする旧二条城の堀際までで留まっていることから, おそらく上御霊であったのだろう⁶⁵⁾。しかし, 翌々年には氏子らが神輿を新造して祭礼が復興しており⁶⁶⁾, その後の安土桃山期では, 御霊祭は安定的に執り行われていた。

この時代で重要なのは, 下御霊社および上下御旅所の移転・廃止である。先に提示した『下御霊神社誌』などによれば, 下御霊本社は天正18(1590)年に現在地に移転し, その頃大門町の御旅所が廃されたという(表1参照)。下御霊社, 上御霊御旅所(中御霊社)とも寺町通沿いに移されているため, 移転の契機が秀吉の京都改造にあったことは間違いない。また, 寺町の形成は, 主として天正15~19年にかけて行われており, 周囲に配された寺院の移転時期から推察すれば⁶⁷⁾, これらの移転時期も, おおむね天正18年前後で問題なかろう。

安土桃山期の京都では, 人口増加とともに市街地開発が急速に進行していた⁶⁸⁾。寛永元(1624)年頃の都市空間を示す『京都図屏風』⁶⁹⁾や, その後より正確に測量された寛永14年の『洛中絵図』⁷⁰⁾には, 上京と下京の間の広範囲に整然とした街路が描かれており, 「中京」が安土桃山期における最も積極的な市街地開発地域であったと推定される。下御霊社や上下御旅所は全てこの域内に位置していたため, 新たに市街地とする土地捻出などのために移転を強いられたのであろう⁷¹⁾。

しかし, 『言経卿記』や『舜旧記』などには, 元和10(寛永元)年まで下御霊御旅所に関する記述がある。

一, 早朝二上御霊御旅所・同下御旅所へ参了, 看経了(『言経卿記』慶長6(1601)年8月14日条)⁷²⁾

一, 上御霊御旅所・同下社御旅所へ参詣了(『言経卿記』慶長12年8月4日条)⁷³⁾
下御霊二舞ノ勸進アル之由也(『舜旧記』元和10年2月23日条)⁷⁴⁾

下御霊御旅所ニテ勸進, 壽命院依同道罷出, 二番聴之也, 満仲・景清, 棧敷へ御酒・餅已下持也(『舜旧記』同年2月24日条)⁷⁵⁾

以上の記録からは, 山科言経らが御霊祭にあわせて下御霊御旅所に参詣しているだけでなく, 祭礼の時期以外では勸進舞が催されていたということもわかる。既に下御霊社, 上御霊御旅所(中御霊社)とも寺町に移転しているのに, 大門町の下御霊御旅所だけがそのまま残されていたとは考えられない。事実, 『京都図屏風』や『洛中絵図』では下御霊社, 中御霊社とも移転後の位置に描かれているが, 下御霊御旅所は描かれていない。

この問題を解く鍵は, 元和10年に下御霊御旅所で催された勸進舞の興行にある。『泰重卿記』同年2月22日条には「為舞聴聞中御霊芝居へ参候」, 翌日条には「今日家中上下女共まいきゝに参候」という記述がある⁷⁶⁾。2月22日から24日にかけての『舜旧記』と『泰重卿記』の記事は, 同一の勸進興行を指すものとみてよいが, その場所を『泰重卿記』では「中御霊」, 『舜旧記』では「下御霊御旅所」と記しているのは, 当時の中御霊社が, 上御霊だけでなく下御霊の御旅所も兼ねていたゆえに, 同一の場所でありながら記録者によって異なる名称で呼ばれていたと考えられる。つまり, 下御霊御旅所は, 本社移転と同

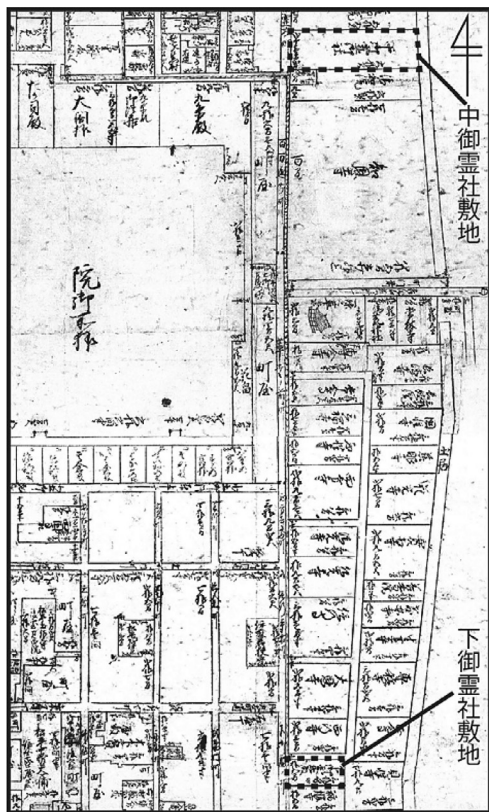


図3 『洛中絵図』の下御霊・中御霊社

出所：宮内庁書陵部編『洛中絵図』より転載・加工。

じ頃に、上御霊御旅所とともに中御霊社へ移転していたと推定される。

当時の中御霊社が下御霊御旅所を兼ねていたとすれば、他にも合理的な説明が見つかることが多い。たとえば下御霊本社と中御霊社の敷地の広さに著しい格差があった点である。『京都図屏風』および『洛中絵図』（図3）では、明らかに中御霊社の敷地が下御霊本社よりも広く、目分量でおよそ4～5倍程度の差がある⁷⁷⁾。

安土桃山期の上下御霊御旅所は、京都における猿楽など勧進興行の中心地でもあった⁷⁸⁾。移転後も引き続き多くの観衆を収容する必要があったことも、広い敷地をあてがわれた理由として考えられる。しかし、これだけ大き

な格差の存在は、当初の中御霊社が上御霊だけでなく、下御霊の御旅所も兼ねていたためとしか考えられない。上下の御旅所を一緒に移転させて統合したからこそ、中御霊社には下御霊本社よりも広い面積が与えられ、祭の際にはそこに上下の神輿とも巡幸・駐輦していたと推測されるのである⁷⁹⁾。さらに「中御霊」という名称も、もともとそれが上下の御旅所を兼ねることに由来すると思われる⁸⁰⁾。

V. おわりに

本稿では、御霊祭の実態解明が、文化史の領域に限らず、中近世京都、特に上京の都市史を考察するためにも必要な課題であることを踏まえ、16世紀を中心に、御霊祭の実態、本社および御旅所の位置の比定と変遷、都市空間との関係などの考察を行った。

その結果、第一に、下御霊社は16世紀末に現在地に移ったが、それ以前には新町通下立売上ル（町勘解由）にあり、さらに同社と一体であった下出雲寺は、12世紀末頃に出雲路（出雲郷）から移ってきたと考えられること、上下の御旅所はそれぞれ新町通下長者町下ル（鷹司町）と室町通丸太町上ル（室町春日）にあったが、下御霊社と同じ頃、中御霊と呼ばれる場所に統合して移転したことが明らかになった。また、あわせて上下両社に係る領域の境界線は、早ければ13世紀初頭、遅くとも14世紀末までに近衛大路（出水通）に定められたと考えられる。

第二に、御霊祭とされる記録を、第一の成果にもとづいて上下に腑分けしたところ、戦国期の記録はほとんどが上御霊祭のものであった。それゆえ同祭が当時の上京を代表する祭礼であったと考えられる一方、上京と下京にはさまれた「中京」地域を氏子区域とする下御霊社・下御霊祭は衰退していたと推察された。

以上の背景として、戦国期には長引く戦乱によって「中京」が荒廃していたこととも

に、安土桃山期には、秀吉の京都改造による市街地開発が「中京」において行われた結果、下御霊社や上下御旅所が移転を強いられたことが推定された。このようにみていくと、16世紀の御霊祭とは、京都の主要都市祭礼の中で、当時の都市空間のドラスティックな変化に最も大きな影響を受けた祭礼といえるのではないだろうか。

一方、今後の課題としては、まず御霊祭の実態や変遷について、17世紀以降の復原・考察が求められている。これは上京における祭礼の通史を完成させることで、都市文化史への貢献が見込まれる。また、祭礼とは人々やその諸組織によって執り行われる行事であるゆえに、都市の物理的空間以上に、人々が暮らす地域社会との関係を検討することが重要である。そのため、本稿では解明に至らなかった御霊祭の維持・運営システムや財政基盤の検討に取り組むことによって、祭礼とそれが執り行われる上京地域の社会構造や経済活動、地縁共同体のあり方などとの関係把握へも研究を進めていく必要がある。

さらに大きな目標としては、本稿の成果ばかりでなく、中近世京都全域をカバーしうる個別祭礼の研究成果を集成した上での比較考察、および祇園会に偏っていた京都の祭礼文化(史)の全体像構築も必要である。これらを発展させていけば、京都全域での祭礼文化と都市空間・地域社会との関係を把握するとともに、上京、下京、西陣といった小地域を対象とする地域性や地域差の検討なども視野に入れられよう。今後はこれらを通じて、中近世の京都における文化史だけではなく、都市史を考察するための一助ともさせていきたい。

(立命館大学・非)

〔付記〕

本稿の作成にあたっては、御霊神社の小栗栖元徳宮司、下御霊神社の出雲路敬直宮司、浄土

宗出雲寺の上田朋裕住職、立命館大学地理学教室の先生方に多大なご指導・ご教示・ご協力をいただきました。ここに記して深く感謝の意を表します。なお、本稿は、文部科学省グローバルCOEプログラム「歴史都市を守る「文化遺産防災学」推進拠点」(立命館大学)の成果の一部である。

〔注〕

- 1) 本稿では、時代区分として明徳3(1392)年の南北朝合一から文正2(応仁元、1467)年の応仁の乱勃発までを室町期、次いで元龜4(天正、1573)年の足利義昭京都追放までを戦国期、次いで慶長8(1603)年の江戸幕府成立までを安土桃山期と表記し、前二者をあわせて中世後期と表記する。安土桃山期は近世として扱う。
- 2) 戦国期京都の都市空間については多くの研究があるが、たとえば①木下政雄「京都における町組の地域的发展—上京立売組を中心として—」日本史研究92、1967、21-51頁、②高橋康夫『京都中世都市史研究』思文閣出版、1983、289-374頁、③高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅編『図集日本都市史』東京大学出版会、1993、104-111頁、④山田邦和「戦国期京都の復元」(山田邦和『京都都市史の研究』吉川弘文館、2009)、199-217頁(初出は2003)などを参照。
- 3) 金田章裕「平安京—京都の特性と本書のねらい」(金田章裕編『平安京—京都 都市図と都市構造』京都大学学術出版会、2007)、6頁。
- 4) 都市史の立場から上京と下京の差異を指摘した研究としては、たとえば土本俊和「陣取放火と地子免除—織田期京都上京における寺社本所領の解体過程」日本建築学会計画系論文集495、1997、239-246頁などがある。
- 5) 本稿でいう「都市祭礼」とは、都市で執り行われるという意味に加え、都市生活に深刻な影響を与えた疫病への対策である御霊会とのつながり、不特定多数の見物客を前提とする風流(ふりゅう)の発達といった特徴を有する祭礼をいう。

- 6) ①林屋辰三郎「郷村制成立期に於ける町衆文化」(林屋辰三郎『中世文化の基調』東京大学出版会, 1953), 228-230頁(初出は1951), ②林屋辰三郎『町衆—京都における「市民」形成史』中央公論社, 1964, 158-160頁など。
- 7) 『祇園執行日記』天文2年6月7日条(竹内理三編『増補続史料大成第四十四卷 八坂神社記録二』臨川書店, 1978, 457頁)。
- 8) 二木謙一「足利將軍の祇園会御成」(二木謙一『中世武家儀礼の研究』吉川弘文館, 1985), 62-103頁(初出は1970)。
- 9) 瀬田勝哉「中世の祇園御霊會—大政所御旅所と馬上役制」(瀬田勝哉『洛中洛外の群像—失われた中世京都へ』平凡社, 1994), 235-288頁(初出は1979)。
- 10) 早島大祐「応仁の乱後の復興過程—祇園会と町・寄町—」(早島大祐『首都の経済と室町幕府』, 吉川弘文館, 2006), 258-292頁。
- 11) ①河内将芳『中世京都の都市と宗教』思文閣出版, 2006, ②河内将芳『祇園祭と戦国京都』角川学芸出版, 2007, ③河内将芳『祇園祭の中世—室町・戦国期を中心に—』思文閣出版, 2012。
- 12) 御霊祭研究の必要性は, 河内も繰り返し提起している(河内将芳『中世京都の民衆と社会』思文閣出版, 2000, 10頁および284頁)。
- 13) 増補史料大成刊行会編『康富記』臨川書店, 1965。
- 14) ①高橋隆三・斎木一馬・小坂浅吉校訂『新訂増補言継卿記』続群書類従完成会, 1965-1972, ②國書刊行会編『言継卿記』続群書類従完成会, 1998。
- 15) 対象は京都において神輿巡幸が行われる都市祭礼とし, 神幸祭と還幸祭はそれぞれ独立して集計した。また, 確実な執行の記録に限定し, 祭礼が延引されたことを示すのみの記録は除いてある。
- 16) これまでの御霊祭研究は, 時代を問わずに渉獵してみても, 民俗学の立場から御霊祭の現状をとりまとめ, 若干の歴史的考察も行った①大島新一「鉦の出る祭とその歴史的背景—上御霊・下御霊両神社の例祭に見える鉦とその氏子組織をめぐって—」京都民俗6, 1988, 57-95頁が唯一の専論と思われる。他に御霊祭にふれた論考として, ②岡田荘司「平安京中の祭礼・御旅所祭祀」(岡田荘司『平安時代の国家と祭祀』続群書類従完成会, 1994), 440-499頁, ③五島邦治「上京一条小川界限」(五島邦治『京都町共同体成立史の研究』岩田書院, 2004), 267-292頁(初出は1999), ④本多健一「中世京都の祭礼における鉦とその変容—比較祭礼文化史のための基礎的考察—」藝能史研究189, 2010, 1-15頁などがある。
- 17) 本多健一「中世京都の御霊祭をめぐる基礎的考察—応仁の乱後の復興まで—」藝能史研究197, 2012, 25-42頁。
- 18) 中世の御旅所は, 神社および祭礼を支える有力な住民が集住する地域に設けられ, 「神を迎える在地側のセンター」として機能していた(前掲9)248頁など)。
- 19) 氏子区域とは, ある神社が鎮座する周囲に, その神社を地元の氏神(産土神)と仰ぐ人々(氏子)がまとまって居住する地域であり, 対して「祭礼敷地」とは, ある神社の祭祀を執り行うため, そこに居住している人々に課役が賦課される地域である。京都の市街地では, 12世紀頃, 近傍の神社を産土神と崇める風習が, おそらく自然発生的に生まれていたが(『今昔物語集』巻30第6話「大和国人得人娘語」), 一方で, 中世前期には各社の「祭礼敷地」が人為的・強制的に設定され, それが地域住民の氏子意識を醸成した側面も強かったと推測される。以上の結果, 遅くとも中世後期には, 現在にも引き継がれている氏子区域が形成された。詳細は①前掲9)261-263・275-276頁, ②前掲16)③278-281頁, ③本多健一「中世後期の京都今宮祭と上京氏子区域の変遷—そこに顕現する空間構造に着目して—」歴史地理学246, 2009, 8-9頁などを参照。なお, 本稿では以後, 上下御霊社の「祭礼敷地」ないし後の氏子区域を, 「上下両社に係る領域」と称する。
- 20) 本節は前掲16)をはじめ, ①下御霊神社編『下御霊神社誌』下御霊神社, 1907, ②出雲

- 路敬直「劍鉾覚書(1)」京都精華学園研究紀要10, 1972, 50-89頁, ③源城政好「上御霊神社・下御霊神社」(谷川健一編『日本の神々—神社と聖地 第五巻 山城・近江』白水社, 1986), 65-70頁, ④平凡社編『京都・山城寺院神社大事典』平凡社, 1997, 156-157・166-167・318・322頁などを参照した。
- 21) 現在の上御霊神社の正式名称は「御霊神社」であるが、本稿では便宜上、近現代では「上御霊神社」、近世以前では「上御霊社」と表記する。また、御旅所と区別する必要がある場合は、適宜「上御霊本社」という表記も用いる。「下御霊神社」、「下御霊社」、「下御霊本社」という表記も同様であり、同一の神社を指している。
- 22) 岩生成一監修『京都御役所向大概覚書下巻』清文堂出版, 1973, 19-20頁。
- 23) 本節は前掲17) および20) などによる。
- 24) 前掲20) ③および④。
- 25) 『小右記』長和4(1015)年8月18日条(東京大学史料編纂所編『大日本古記録 小右記四』岩波書店, 1967, 67頁)。
- 26) 『明月記』建永元(1206)年8月21日条(『明月記 第一』國書刊行会, 1911, 472頁)に「両方祭渡之」とあり、これが上下の御霊祭を示すと考えられている(前掲16) ②)。
- 27) 『吉田家日記』応永9(1402)年7月18日条(東京大学史料編纂所編『大日本史料 第七編之五』東京大学出版会, 1934, 589頁)など。
- 28) 『親長卿記』明応7年8月18日条(笹川種郎編・矢野太郎校訂『史料大成続編41 親長卿記三』内外書籍, 1941, 332頁)など。
- 29) 前掲20) ①など。
- 30) 『明月記』寛喜2年7月18日条(『明月記 第三』國書刊行会, 1912, 227頁)。
- 31) 前掲11) ③河内将芳「中世の祭礼と都市空間—祇園会神輿渡御と御旅所を素材に—」139-157頁(初出は2006)。
- 32) 前掲22)。
- 33) 大阪女子大学近世文学研究会編『日記紀事本文と索引』前田書店, 1982, 347-348頁。なお、『日記紀事』には上下御霊祭とも神幸路は記されていない。
- 34) 『音無川』, 宝永5(1708)年(新撰京都叢書刊行会編『新撰京都叢書第10巻』臨川書店, 1985, 165頁)。「宝永大火」とその後の都市改造については、鎌田道隆「近世都市における都市開発—宝永五年京都大火後の新地形成をめぐる—」(鎌田道隆『近世京都の都市と民衆』思文閣出版, 2000), 236-254頁(初出は1996)参照。なお、この時に移転させられた町々は、移転先の二条新地でも下御霊社への信仰を維持し、新たな氏子区域を形成した。また、讃州寺町、菊鉾町、和国町は町が守護するシンボリックな祭具、劍鉾も携えていった(図2の②, ③, ⑥)。詳細は前掲20) ②参照。
- 35) 『大概覚書』によれば、7月18日の下御霊祭神幸路は烏丸丸太町より西側のルートが逆になるだけで、基本的に還幸路と同じである。
- 36) 『洛中洛外図屏風』の読解にあたっては、京都国立博物館編『洛中洛外図 都の形象—洛中洛外の世界』淡交社, 1997などを参照した。
- 37) 増補「史料大成」刊行会編『増補史料大成 第38巻 康富記二』臨川書店, 1965, 322頁。
- 38) 小泉宜右校訂『経覚私要鈔 第7』八木書店, 2008, 201頁。
- 39) なお、上御霊御旅所(中御霊社)の旧地を、現在の土京区中御霊函子町に比定する説が散見されるが、これは間違いであり、当町名は近隣に近衛家の「御霊殿」という邸宅があったことに由来する(森田恭二「花の御所とその周辺の変遷」(永島福太郎先生退職記念会編『日本歴史の構造と展開』山川出版社, 1983), 443-467頁)。
- 40) 前掲20) ②。大門町の石竹鉾は、永享7(1435)年に後花園天皇より寄附を受けたとされる伝承を有し、永正15(1518)年に修理した旨の墨書があったという。その後1979年頃に町の守護がなくなると、現在は下御霊神社の蔵に保管されている。
- 41) 増補「史料大成」刊行会編『増補史料大成 44 親長卿記補遺・宣胤卿記一』臨川書店, 1965, 167頁。
- 42) 前掲41) 173頁。

- 43) 東京大学史料編纂所編『大日本史料 第七編之五』東京大学出版会, 1934, 815頁。
- 44) 『京都坊目誌』(新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書第19巻』臨川書店, 1968, 14頁)。なお, 下出雲寺は『拾芥抄』にその名前があるので, 14世紀頃まで現存していたが, 応仁の乱の兵火によって焼失したといわれる(『菟藝泥赴』)。
- 45) 前田義明「御霊神社境内の採集遺物」京都市埋蔵文化財研究所研究紀要10, 2007, 211-226頁。なお, 上出雲寺は平安末期には衰退したが(『今昔物語集』巻20第34話), その本尊である聖観音菩薩像は, 江戸時代まで上御霊社境内の観音堂に祀られていた(『山州名跡志』, 『都名所図会』など)。さらに明治5(1872)年, 本像は神仏分離のために上京区藪之下町の浄土宗光明山念仏寺(現在は出雲寺)に移されている(『京都坊目誌』)。
- 46) 『群書類従・第十六輯 和歌部』続群書類従完成会, 1987, 196頁。
- 47) 東京大学史料編纂所編『大日本史料 第四編之十三』東京大学出版会, 1913, 56-62頁。
- 48) 前掲20) ④575-576頁。毘沙門堂とは, 現在は山科区安朱稲荷山町にある天台宗寺院であり, 寛文5(1665)年に現在地へ移転している。
- 49) 『百鍊抄』永久5(1117)年1月13日条(『國史大系 第拾四巻』経済雑誌社, 1901, 68頁)に「祇園別宮少将并炎上」とある。
- 50) 前掲28)。
- 51) 前掲2)。
- 52) 竹内理三編『増補続史料大成 第三十六巻 大乘院寺社雑事記十一』臨川書店, 1978, 356頁。
- 53) 『実隆公記 巻四上』続群書類従完成会, 1961, 54頁。
- 54) 東京大学史料編纂所編『大日本古記録 二水記(三)』岩波書店, 1994, 10頁。
- 55) 『続群書類従・補遺 お湯殿の上の日記(四)』続群書類従完成会, 1987, 245頁。
- 56) 國書刊行会編『言継卿記 第三』続群書類従完成会, 1998, 297頁。
- 57) 当時の烏丸町は現在の烏丸通一条下ル, 「廣橋」は広橋兼秀邸であり, 一条通烏丸西入ル広橋殿町にあった。
- 58) いずれにも劍鉾に先導された2基の神輿が巡幸する様子が描かれている。これらは現代でも京都の祭礼を象徴する特殊祭具, 劍鉾に関する最も早い記録であり, 戦国期の上御霊祭が劍鉾を育んだ可能性が高い(前掲16) ④)。
- 59) 『言継卿記』永禄11年7月18日・8月16日条(國書刊行会編『言継卿記 第四』続群書類従完成会, 1998, 256・263頁)など。
- 60) 桑山浩然校訂『室町幕府引付史料集成 上巻』近藤出版社, 1980, 406頁。
- 61) 前掲2)。
- 62) 『言継卿記』天文18(1549)年9月21日条(高橋隆三・斎木一馬・小坂浅吉校訂『新訂増補言継卿記 第二』続群書類従完成会, 1972, 428頁)など。
- 63) ただし, 当時の上御霊祭の維持・運営システムや財政基盤などは, 現時点ではほとんどわからない。今後の課題としたい。
- 64) 『永禄以来年代記』(『続群書類従・第二十九輯下雑部』続群書類従完成会, 1989, 269-270頁)。
- 65) 上京焼討範囲の想定復原図は, 前掲19) ③16頁参照。
- 66) 『続史愚抄』天正3年8月18日条(黑板勝美編『新訂増補國史大系 第十四巻 続史愚抄中篇』吉川弘文館, 1966, 724頁)。
- 67) 前掲2) ③142-143頁。たとえば中御霊社北側の遣迎院は天正13(1585)年に, 下御霊社北側の西行(光)寺は同18年に移転してきていた。
- 68) 安土桃山期京都の人口増加や市街地開発の状況については, ①小川保「天正・文禄期の京都の町一大中院文書による概観」京都市史編さん通信251, 1993, 1-4頁, ②杉森哲也「聚楽町の成立と展開—近世初期京都市構造の再検討—」年報都市史研究3, 1995, 91-116頁, ③横田冬彦「近世社会の成立と京都」日本史研究404, 1996, 50-70頁, ④土本俊和「小屋がけによる町—聚楽第建設に促された天正末京都の都市形成」日本建築学会計画系論文集500, 1997, 221-

228頁などを参照。

- 69) 前掲2) ③134-138頁。
- 70) 宮内庁書陵部編『洛中絵図』宮内庁書陵部, 1969。
- 71) 秀吉の京都改造においては、他に祇園社や稲荷社の御旅所も移転させられており(前掲31) および五島邦治「稲荷旅所の変遷」(五島邦治『京都町共同体成立史の研究』岩田書院, 2004), 117-147頁(初出は1995)参照), それらの動向に秀吉政権の神社政策が反映されているとも考えられる。
- 72) 東京大学史料編纂所編『大日本古記録 言経卿記十一』岩波書店, 1980, 132頁。
- 73) 東京大学史料編纂所編『大日本古記録 言経卿記十四』岩波書店, 1991, 65頁。
- 74) 鎌田純一・藤本元啓校訂『舜旧記 第六』続群書類従刊行会, 1994, 157頁。
- 75) 前掲74)。
- 76) 武部敏夫・川田貞夫・本田慧子校訂『泰重卿記 第二』続群書類従刊行会, 1998, 202頁。
- 77) 当初の下御霊社敷地は、東西30間南北15間の約450坪であったが、安永2(1773)年頃、隣接の土地を入手して拡張され、現在は約820坪ある(前掲20) ①11丁)。
- 78) 小笠原恭子『都市と劇場—中近世の鎮魂・遊楽・権力—』平凡社, 1992, 16頁。
- 79) そうだとすれば、天正18年以降も、山科言経が御霊祭の時期に上下御旅所を別々に参詣しているの是一見奇異に思えるが(『言経卿記』慶長6(1601)年8月14日・同年8月17日・同8年7月27日・同9年8月18日・同10年7月18日・同年8月11日条, 同12年8月4日条), その場合、必ず両所を続けて記して、その間で別の場所に寄っていることはない。これらの記録は、両御旅所の場所が異なっていたのではなく、同一場所に上下両神輿が駐輦していたのを順繰りに参詣していたと解釈すべきであろう。
- 80) その後、寛文5(1665)年の『京雀』には「中御霊前町 此町は上御霊の御旅所にて」(新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書第1巻』臨川書店, 1967, 184頁)と明記されているため、17世紀半ば頃に中御霊社における下御霊御旅所としての機能が放棄され、同社は上御霊単独の御旅所になっていたと思われる。その理由として、中御霊社が上御霊社氏子区域内に設けられたこと、当時の巡幸路が氏子区域西部を重視するのに対してきわめて不便な位置であったことなどが考えられるが、明確なことはわからない。以降は下御霊社に独立した御旅所は設けられず、境内の拝殿を御旅所とみなしている。